

国際サンゴ礁年2018

サンゴ礁は「海の熱帯林」と呼ばれるほど多様で豊かな生態系です。私たちにも、豊かな漁場、津波・高潮等の被害を軽減する天然の防波堤、癒やしや観光資源などの恵みを与えてくれます。しかし、世界中で、海水温の上昇が原因と思われるサンゴの大規模な白化(はっか)現象が起きています。

2018年は、国際サンゴ礁イニシアチブ(ICRI)が定めた「国際サンゴ礁年」です。日本国内でも、みなさん一人一人にサンゴ礁のことをもっと知ってもらい、力を合わせてサンゴ礁を守るよう、よびかけていきます。

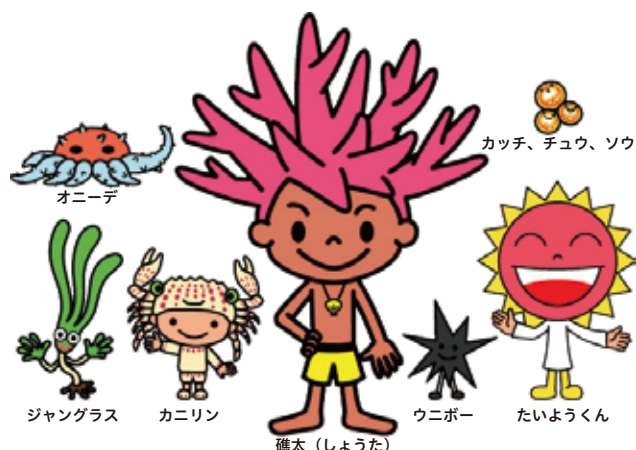


つながる、広がる、支えあう

日本における国際サンゴ礁年2018の目標は、「つながる、広がる、支えあう」です。これは人とサンゴ礁、人と人が互いにつながり、活動が広がり、支え合っていくことを目指しています。



国際サンゴ礁年 2018 を 応援するなかまたち



こんな活動をしています

企業・団体、NGO、市民、研究者、メディア、行政などの多様な主体が連携し、それぞれの立場から活動することが期待されています。このため、サンゴ礁保全の活動の登録と広報、保全活動を支援する企業等をオフィシャルサポーターに任命するなどしています。

※登録された活動は以下の Facebook に掲載しています
<https://www.facebook.com/IYOR2018JP/>



サンゴ礁って知ってる？

サンゴはいったい、何のなかまでしょうか？植物や石みたいですが、実は動物なのです。また、動物なのに、植物のような特徴も持っています。

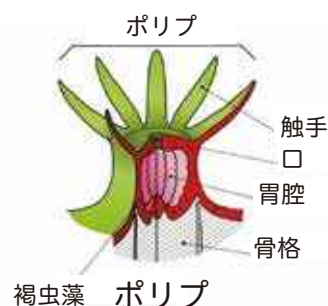
サンゴは動物

サンゴはイソギンチャクに近いなかまで、プランクトンをつかまえて食べます。

サンゴの体は、上に口が開いたふくろのような形をしていて、食べものを食べる「口」と消化する「胃腔」からできています。「口」からは食べものを飲みこむだけでなく、ふんも出します。口の周りにある「触手」は手のようにはたらき、エサになるプランクトンをつかまえて口に運びます。また、体の下には石のようにかたい「骨格」があります。これらは「ポリプ」と呼ばれ、また、サンゴの多くは「ポリプ」が集まってつながった「群体」というかたちで生活しています。

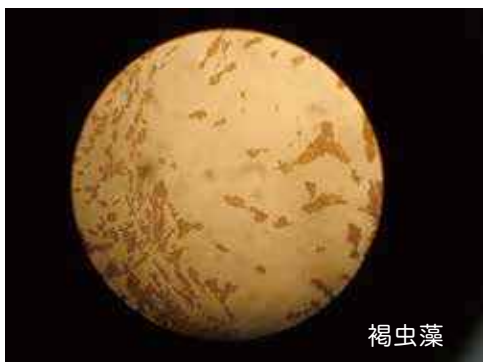


枝状のミドリイシ属サンゴ Photo: 磯村尚子



植物のようなサンゴ

サンゴの体の中には「褐虫藻」という直径0.01ミリほどの植物プランクトンがたくさん生きています。褐虫藻は太陽の光をあびて栄養を作り（光合成）、その栄養をサンゴにあたえています。サンゴも褐虫藻がたくさん栄養をつくれるよう光がよくとどく浅い海に住んでいます。



褐虫藻

サンゴの一生

サンゴは動物なので、卵（または子ども）をうみます。うまれた卵は、「幼生」という子どもになり、しばらく海をただよった後、岩などの適当な場所に体を固定してポリプとなります。ポリプは分れつしてどんどん数をふやし、「群体」として大きくなっていきます。多くのサンゴは年に1回、みんなそろって産卵しますが、時期は種類によってちがいます。ミドリイシ属のサンゴは、おもに4～6月の満月のころに産卵します。





サンゴ礁のめぐみ

たくさんの生きものがすむ
 サンゴ礁には枝状やかたまり状、テーブル状などさまざまな形のサンゴが集まり、複雑な空間を作り出しています。そのため、魚や貝をはじめ、多くの生きものたちが集まります。



食べものがとれる
 サンゴ礁にはさまざまな魚や貝などの生きものがいます。サンゴ礁の地域の人たちは、昔からこれらを大切な食べものとしてきました。現在も、サンゴ礁域独特の多彩な漁法を営んでいます。



観光地になる
 サンゴ礁を泳ぐ色とりどりの魚たち、海そうの間にかくれている美しいウミウシなど、ダイバーにとってはサンゴ礁は宝の山。観光の対象としても大切です。



はげしい波を防ぐ
 島の周りに広がるサンゴ礁は、はげしい波を食い止め、海辺に住む人や生きものを守っています。2004年のインド洋津波の時は、サンゴ礁が良い状態の地域は被害が小さかったそうです。



学習や研究に役立つ
 浅い海にいろいろな生きものがすむサンゴ礁は、学習や研究に役立ちます。自然を体で感じながら、その仕組みを考える学習の場になります。また、いろいろな大学や研究所などが研究を行っています。



生活や文化をつくる
 サンゴでできた石灰岩を、昔から石垣や、柱・壁・礎石など、建築に使っていました。農業では、畑を耕す時や脱穀に利用していました。



サンゴ礁に対する危機

サンゴは水温18～30度のあたたかい海にすむ生きものです。しかし水温が高くなりすぎると体内の褐虫藻を失い、栄養をとれなくなり、弱っていきます。この時、サンゴの色がうすくなったり、骨格が白くすけて見えるようになるので、「白化現象」といいます。このまま地球温暖化が進めば、白化現象はこれからもよく起こるだろうと心配されています。また、2016年にも大規模な白化が起きました。

気候変動(地球温暖化)

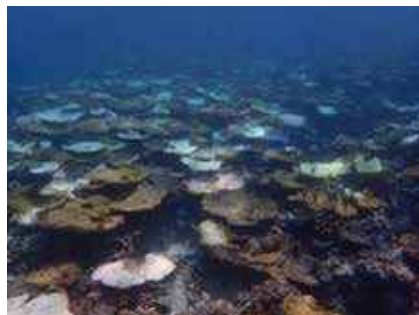
天敵(オニヒトデ等)

赤土による汚染

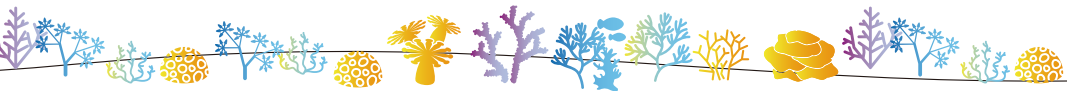
不適切な観光(踏みつけ等)



白化前のサンゴ礁



白化後のサンゴ礁



サンゴ礁保全のための環境省の取組とみんなができること

2020年度末までに地域社会と結びつけたサンゴ礁生態系の保全を目指して、2016年3月に「サンゴ礁生態系保全行動計画2016-2020」が策定されました。

この中では、陸から流れ出る赤土等がサンゴ礁生態系に影響を与えていることから、赤土の低減等の対策をすること、観光客によるサンゴの踏みつけ等による影響が起こっていることから、サンゴ礁にも配慮したツーリズムを進めること、そしてサンゴ礁で採れる魚や海藻等の海の恵みを広く知ってもらいつつ、今後の適切な活用につなげることを主な課題として、国内3地域でモデル事業を展開しています。



サンゴ礁の自然再生事業

「自然再生事業」とは、損なわれた自然環境を取り戻すことを目的とした事業です。サンゴ礁を対象とした自然再生事業は沖縄の「石西礁湖」や高知県の「竜串湾」などで実施されています。



着床具の海底への設置

これらの事業では、サンゴ礁生態系の保全・再生のため、多様な主体との連携により、赤土対策などの生育環境の保全や自然環境学習などの取組が幅広く実施されています。石西礁湖の自然再生事業では、海の中の石に似せた「着床具」(着底基盤)を用いて自然加入に近い状態でサンゴの移植を進めています。



海洋保護区

開発や漁業、観光などを持続可能な形で行い、サンゴ礁などの環境を守り適切に利用するために設置される保護区域を「海洋保護区」といいます。日本では、「海中公園地区」、「海中特別地区」、「保護水面」などがこれにあたります。



オニヒトデの駆除

オニヒトデの駆除などの保全活動も保護区を中心に行われています。最近では地域に住む漁業者や住民などが、自主的に保護区を決めて自ら保護、管理を行う「地域主体の保護区」という試みが各地で始まっています。



モニタリングサイト1000 (サンゴ礁調査)

2003年度より、全国24箇所のサンゴ礁やサンゴ群集を対象としたモニタリング調査を実施しています。毎年、サンゴ被度や白化率、オニヒトデの発生状況などを調査しており、その結果は様々な保全対策に活用されています。今後は本調査で収集したデータの解析を行うなどして、サンゴ礁の健康診断(健全性の評価)にも取り組んでいくこととしています。

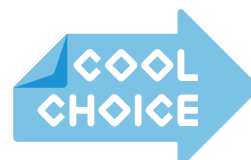


調査風景



国民運動 「COOL CHOICE(=賢い選択)」

皆さん一人一人が以下のような取組をすることで、サンゴ礁の保全にもつながります。



賢い選択

★賢い選択の事例

- ・室温は、冷房使用時28度、暖房使用時20度を目安にする
- ・省エネ家電、LED照明に買い換える
- ・エコカーを選択する。エコドライブを実践する
- ・宅配便はできるだけ1回で受け取る など

この印刷用紙は森林認証用紙を使用しています。



発行者：環境省自然環境局自然環境計画課
発行年月日：2018年1月

